

就職活動を振り返って

『挑戦する心』

兵庫県立工業技術センター
生産技術部機械システムグループ

福井 航 (C58)



はじめに、この度の寄稿の機会を頂戴しましたことに感謝申し上げます。就職活動を迎える学生の皆さんにとって、本稿が何かの参考になれば幸いです。就職活動を終えられた皆様は、こんなやつもいるんだとご笑読いただければと思います。

さっそく自己紹介から入らせていただきたいのですが、私は経歴がややこしく、どこから書き出せば「就職活動の振り返り」になるのか難しいので、大学入学から時系列に沿ってちょっと(かなり)長めに自己紹介させていただきます。私は1999年に情報知能工学科に入学しました。入学当時はITバブル真っ只中で、何か最近流行ってるみたいだし良いんじゃない?程度の認識で、具体的に学びたいことがあるわけでもなく入学しました(そして卒業する頃にはITバブルははじけていました)。学生時代は勉強もそこに、自転車でユースホステルを渡り歩くサークルに入り、北は北海道から南は九州まで、日本中を走り回っていました。あまり真面目な学生では無かったように思います。研究室配属では小島史男先生の「人がぶつかったらケガするくらいのサイズのロボットを作ろうと思っている」の一言を聞いて、迷わず小島・小林研究室に入りました(後で気付きましたが、

小島先生の授業では可と不可しかもらったことがありませんでした…。こんな学生の面倒を見ていただいてありがとうございました)。配属後に小林先生から「100万あるから好きに使って好きに作りなさい。でも、ドライバーもハンダゴテも無いから、その辺を買うところからね(にっこり)」と言われて、マジかよと思いつつコーナンまで工具を買いに走り、夜遅くまで作業していました。大変でしたが、これが多分私の研究者人生の原体験だと思います。修士課程では水中移動ロボットの自己位置認識というテーマで、市販の潜水艦ラジコンを改造してカメラを取り付け、パソコンで制御してプール(風呂桶)の中を走らせていました。今風に言うと水中ドローンでしょうか。防水処理がなかなかうまく行かなかったのに、何度浸水しても動き続けてくれたKEYENCE社のカメラには感謝しかありません。

修士課程を卒業するタイミングで1回目の就職活動をするのですが、移動ロボットの制御をやっているうちに自分が乗ってみたいくなり、ASV(Advanced Safety Vehicle)に興味を持って、自動車会社に的を絞りました。各社のASVや交通安全に関する取り組みを調べて差を探し、優れた取り組みをしているところを見つけたらそこに貢献したいと言い、遅れている部分を見つけたらそこを自分が何とかしたいと言いながら就職活動をしました。就職氷河期の底は抜けたかなというくらいのタイミングで、第一志望の本田技研工業株式会社からは学校推薦が来ていなかったのですが、なんとか自由応募で内定を貰うことができました。

本田技研ではASVの部署に新人は配属されず、二輪車の電装設計を担当していました。学生時代は弱電ばかりやっていたのに、ここで電気系のことをやらせてもらったのは僥倖でした。バイクに馴染みのない方には分かりにくいと思いますが、フォルツァやジャイロキャノピーといった、車名は知らなくても街中で見たことはある機種を担当させてもらったのは今でも名刺代わりに使えるので助かっています。

2008年3月、ちょうど担当していた機種が量産移

管されて手が空いたタイミングで退職し、古巣の研究室に戻り博士の学生として再入学しました。博士課程では人間の手のような五指ロボットハンドの開発と制御というテーマで、研究をしていました。出戻ってきた頃は就職活動が売り手市場になっており、再就職も何とかなるだろうと軽く考えていましたが、リーマンショックが起これば一気に景気が後退、そこからじわじわと回復してきたところに今度は東日本大震災が追い打ちをかけ、自分の再就職は大丈夫だろうか心配しながらの学生生活でした。

そんなこんなで博士課程を卒業するタイミングで2回目の就職活動をしました。修士の時と同じように民間企業への就職を目指しても良かったのですが、せっかく博士課程に出戻ってきたので今度はアカデミックな方を受けてみようと思いました。高専から編入してきた後輩から言われた「福井さんは高専の先生とか向いてると思いますよ」という(言った本人は多分忘れているであろう)言葉で、今まで縁もゆかりもなかった高専に興味を持ち、自転車旅行で何度も訪れていた大分県にある大分工業高等専門学校の講師として着任しました。

大分高専では6年生(高専は6年制なので大学2年生相当)の卒研指導でロボットハンドを設計製作しました。教え子たちと一緒にSolidWorksで機構を設計したり、旋盤やフライス盤を回して加工したりしていました。高専に着任するまで旋盤やフライス盤を使ったことが無かったので、逆に学生から加工技術を教われたのはこれまた幸運でした。

その後、博士課程の指導教員だった小林 太先生からの勧めもあり、兵庫県立工業技術センターに転職することになりました。工業技術センターではロボットからは少し離れ、ロボット工学的な知見を活かした筋骨格解析を主な研究テーマとして活動しています。また、色々なところにお世話になったおかげで、情報知能工学科の卒業生でありながら、プログラミングや計測制御以外に、電気、CAD、機械加工などでもできるようになり、様々な企業からの技術相談に対応しております。

このように2度の就職活動と1度の転職活動を振り返りますと、出来そうかどうかは置いて興味のある事に向かって好き勝手に走ってきただけのように思います。そして、それらが全部今に繋がっているのを感じます。逆に考えると、既にできることの範囲内だけで人生を選択してきたらこんな原稿(ネタ)も書けず、あまり面白くない人生だったのではないのでしょうか。今から就職活動を迎える学生さんは自分で自分の限界を決めてしまわず、面白そうだった業界や業種にはどんどんチャレンジして行ってください。あとで違うなと思ったら転職というものもありだと思います。「少しでも興味を持ったこと、やってみたいと思ったことは、結果はともあれ手をつけてみよう。幸福の芽は、そこから芽生え始める。(本田宗一郎)」